

宇木汲田貝塚 : 1966・1984年発掘調査の再整理調査 報告書

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

松本, 圭太
九州大学大学院人文科学研究院 : 学術研究員

高宮, 広土
鹿児島大学総合科学域総合研究学系 : 教授

上條, 信彦
弘前大学人文社会科学部 : 教授

他

<https://hdl.handle.net/2324/4372000>

出版情報 : 2021-03-25. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
バージョン :
権利関係 :

第3章 宇木汲田貝塚発掘調査のトレンチ位置と層位

松本圭太

1. 松浦史談会による調査

1930年、宇木村の耕地整理中に本貝塚は発見された。その通報を受け、松浦史談会による調査が3回にわたって行われている。松浦史談会の調査については、龍溪頭龍氏による記録がある（龍溪1939）。発見同年の1930年の調査では、幅30間、長さ40間、深さ3尺程度が調査され、柏崎貝塚に比して貝類は豊富であるが、完形の土器類が殆どないことが指摘されている。龍溪氏は、江戸時代初期の新田開発による攪乱をその要因として挙げる。弥生土器以外には、貝類、イノシシ、シカの獣骨、石斧、石棒、石包丁、滑石製釜片を出土した。

第2回調査は1938年2月であり、幅2間、長さ3間、深さ3尺が調査され、上層部1尺は黒土で、その下は貝殻で覆われており、殆ど出土物はなかったとされる。そこで、これより北部の黒土混じりの貝層を調査し、石剣、片刃石斧、石包丁、刳圧痕のある弥生土器底部などを発見した。

同年5月の第3回の調査では、石斧、片刃石斧、イノシシの牙、「支那豚」の下顎、ウシの下顎、「穴熊」、弥生土器などが発見された。以下に記す1966年の調査で発見されたトレンチは、1938年の調査によるものであることが推定されている（小田1982）（図11・12）。

2. 日仏合同調査

(1) 調査区

1965-1966年の日仏合同調査については調査区・層位とも、小田富士雄氏による報告（小田1982）に基づいて記述する。

1965年には貝塚の範囲を確認するための試掘調査が行われた。貝塚の範囲を推定し、その範囲の中央部で直交するように、東西（1×15m）方向と南北（1×20m）方向に試掘トレンチ2本を設



図11 1966-1984年調査区位置（斜線部分）

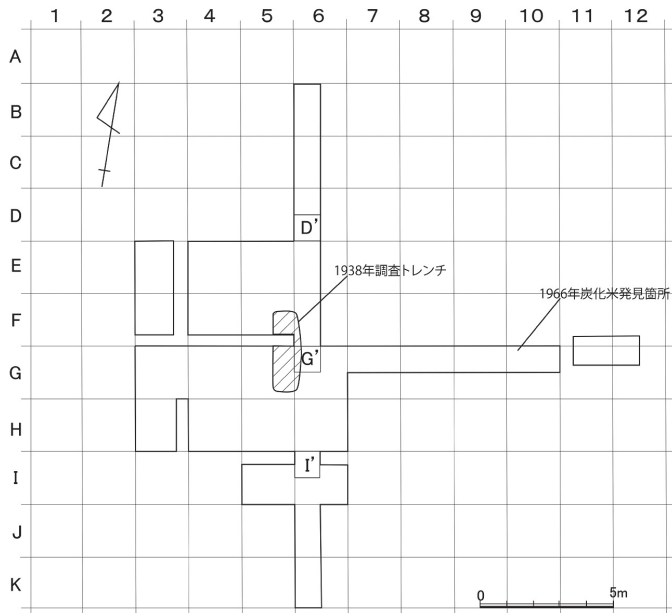


図12 1938年・1966年調査区

も貝層を5cmずつ掘り下げていく方法が採られた。これに基づいて、貝層上面から5cmごとにa・b・c…層としながら遺物を取り上げた。E～I-3～6区では、貝層(a～d)上半には板付IIa式が含まれ、下半は板付I式と夜臼式土器を主体とする。貝層より下の黒褐色土層(e, f)も板付I式と夜臼式土器を主体とし、それ以下は確認できていない(図13左)。なおこの区画のうち、E～G-5～6区では攪乱の形跡が認められ、龍溪氏らが行った発掘によるものと推定できる3×1mのトレンチが検出された(図12)。

G-6～K-6区では貝層がみられず、耕作土層の下に黒褐色土層がみられる。黒褐色土層の最上層に弥

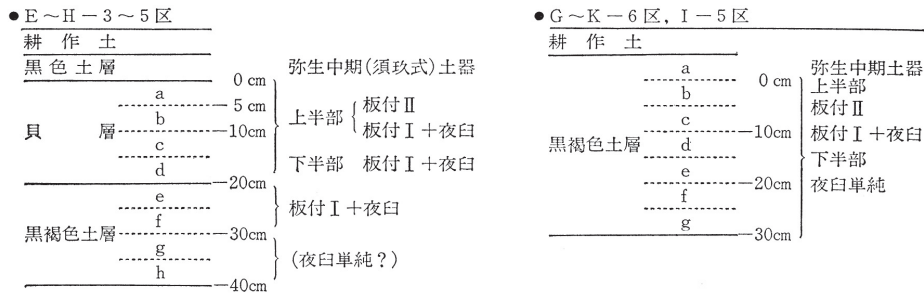


図13 日仏合同調査における層位模式図

生中期土器が包含され、これをa層として、以下5cmごとに、b・c・d…層とした。b層以下の上半には板付II式が、下半部には板付I式と夜臼式土器が主体として確認された(図13右)。

上記とは異なる貝層のグループがG～I-6区東壁沿いに現れ、G-6～10区にも続いていた。この貝層の上面は地表から74cm、厚さ16cmあり、夜臼式単純の様相を示している。この層中からイノシシの頭骨および炭化米2粒が検出された。貝層下は青灰色の無遺物層で、貝層東端は東に急激に傾斜していく。

さらに、遺物包含層の最下部を確認するため、貝層の北端(D-6区)、貝層中(G-6区)、貝層外南の高所(I-6区)をそれぞれ1m×1m掘り下げ、各々D'区、G'区、I'区とした。D'区では、貝層より上の黒土層は板付II式まで遡り、その下には貝層下にみられた黒褐色土層が続く。黒褐色土層には夜臼式土器が含まれる。G'区の貝層は40cmの厚みを持ち、上半部では板付II式、I式、夜臼式が混在

定した。貝層上面までを露出した結果、貝塚の範囲が東西11m、南北6mにわたっていることが確認された。

これに基づいて、1966年に発掘調査が行われた。65年の試掘トレンチに合わせ、2m単位のグリッドを設定し、西から東に1・2・3…13区、北から南にA・B・C…K区とし、両記号を組み合わせてグリッド区画を表現した(図11・12)。

(2) 層位

耕作土層の下に須玖式土器を含む黒土層がみられ、その下が貝層となる。貝層上面が南西から北東方向に傾斜していることを確認し、傾斜に合わせて各区画と

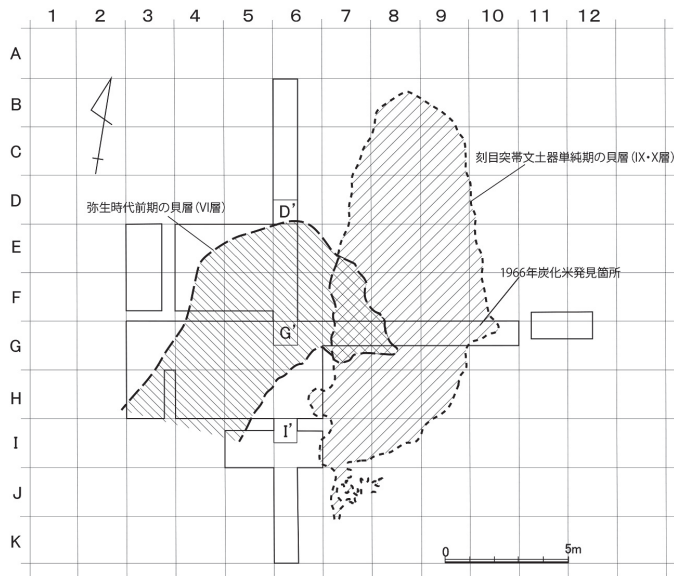


図14 1966年調査区と貝層範囲 (1984年) の対比

し、下半部では板付I式と夜臼式の共存状態であるが、夜臼式が優勢である。I'区では耕作土層下の黒褐色土層に板付I式と夜臼式土器の共存状態がみられた。

本調査の特筆すべき成果は、上記のように、夜臼式土器単純層から炭化米が発見されたことである。この段階にコメ栽培が確実に行われていたことが証明された。夜臼式土器単純期の貝層の範囲は次の1984年の調査で明らかとなる (図14)。

3. 1984年の九州大学による調査

(1) 調査区

1984年の調査については調査区・層位とも、田崎博之氏による報告 (田崎1986) に基づいて記述する。

本調査は、前調査で部分的に検出された「夜臼式土器単純層」の面的な広がりを捉えるべく行われた。まず、1966年の調査区 G-6~10区を確認し、それを基に G-4~11区、H5~6区を再発掘し、前調査中断面を確認した。前調査と同様の2m単位のグリッドを設定し、G-5~11区、H-5~6区の未掘部分を掘り下げた。攪乱や排水用暗渠の重複部分を除いた、G~H-7~9およびF-8区を貝層調査の主眼とした。またF~H-6~11区の全面を貝層

上面まで掘り下げ、攪乱坑を面的に確認したのち、前調査の貝層、本調査の貝層、貝層下の黒色土層との関係を明らかにする目的で、F-6~7区の攪乱坑を掘り下げた。さらに貝層範囲の確認のため、B~E-6区西側を1m幅で掘り下げ、B~E-8区にもトレンチを入れた。C-8区では甕棺墓と土壇墓を1基ずつ検出し、C-9区に調査区を拡張した。

他では、耕作土下の黒色、黒褐色土層から多くの刻目突帯文土器を出土したJ~K-6区を含むJ~K-5~8区にも調査範囲を広げ、さらに遺構の南側の広がりの確認のため、M-6区に1×2m、O~Q-6区に2×4mのトレンチを設定した (図15)。以上の調査記録では、2mグリッド内が1×1mの小4区画に区分され、発掘進行方向に向かってa、b、c、dとされている。

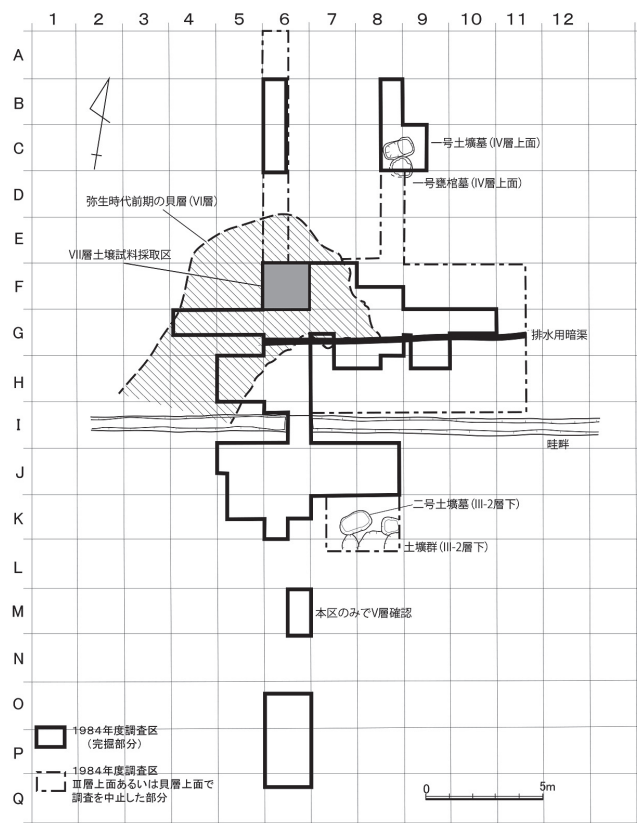


図15 1984年調査区 (VII層までの状況)

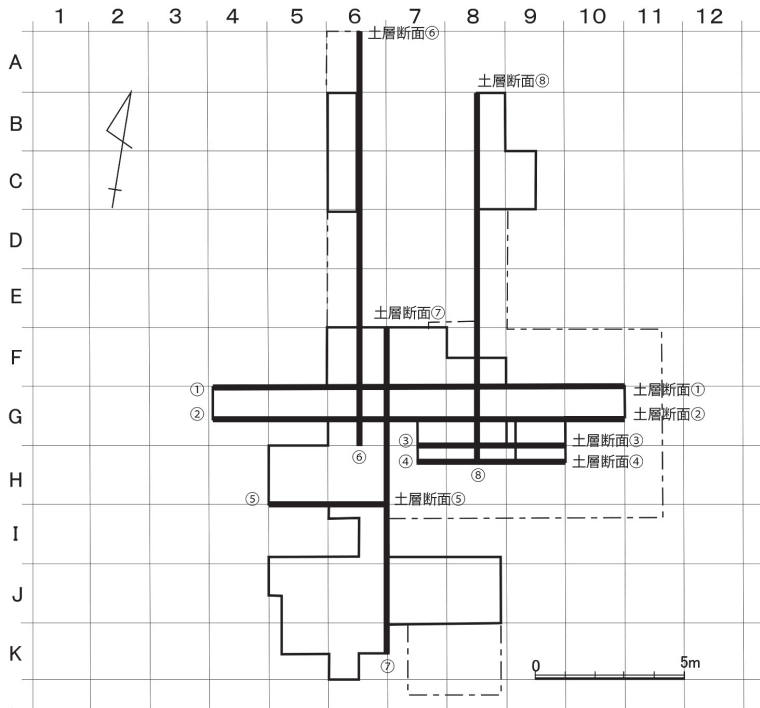
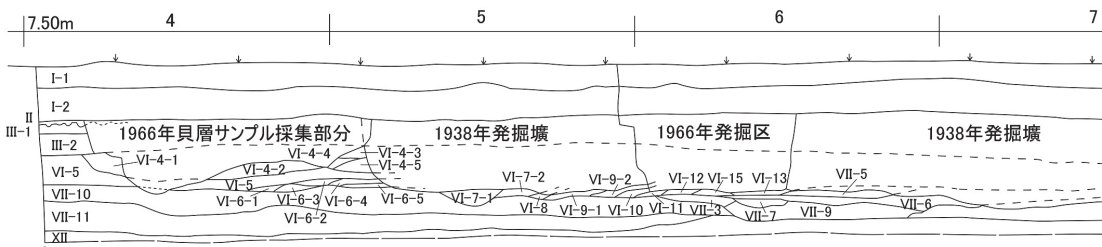


図16 1984年調査区における土層断面の位置 (本章記載分)

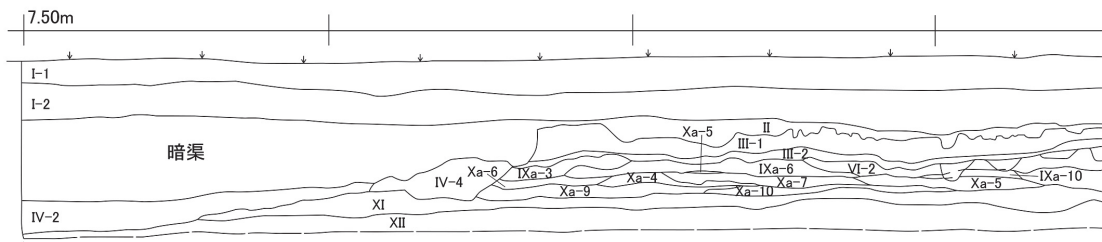
(2) 層位

1984年の調査では、5 cmごとに分層した前調査とは異なり、肉眼で識別できる層序ごとに発掘が進められた。これには、凹凸のある地形に堆積が進んだ場合を考慮し、堆積過程における一定時間幅内の生活面を面的に把握する目的があった。基本的な層位はI~XII層で、これら各層位が(IX、X層に関してはそれぞれa、bに細分した後)分層され、III-1層やIXa-9層のように示される。さらに貝層を中心として、例えばXa-2-22のように、堆積単位(ブロック)が識別されている。本報告における土器、石器は基本層位は明

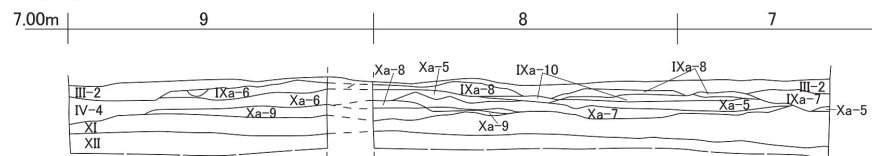
G-4~10区北壁(土層断面①)



G-4~10区中央壁(土層断面②)



G-7~9区南壁(土層断面③)



H-7~9区中央壁(土層断面④)

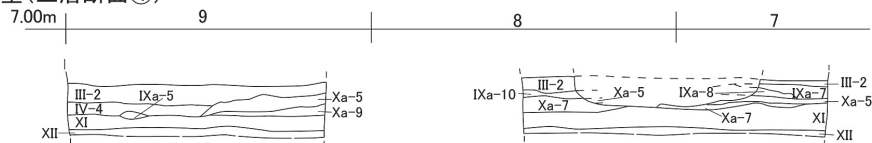


図17 1984年調査土層断面図①~⑤ (1/50)

確であるが、細分層あるいは堆積単位まで特定されていないものが含まれている。一方で、炭化物や骨、貝などを含んだ土壌試料については、殆どが堆積単位まではっきりしている。そこで以下では、基本層位の概要を述べ、土壌試料の採取された単位に関する箇所についてはやや詳しく記載することにする（図16～18）。

I層

現在の水田耕作土と床土層。

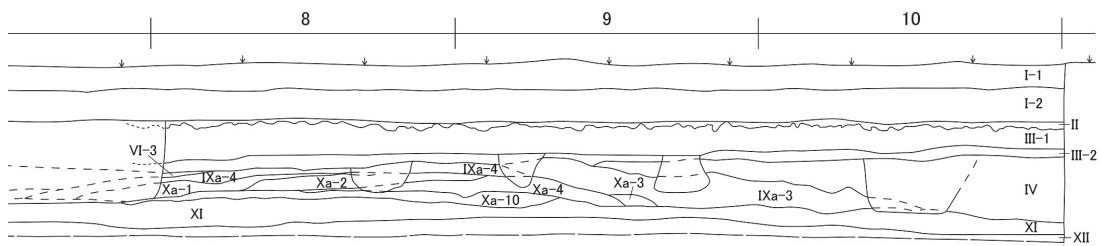
II層

調査区全体に広がる、暗オリーブ褐色～オリーブ色の砂層。宇木川が氾濫して堆積した砂層であり、下層へいくに従い砂粒が粗いものに変化する。

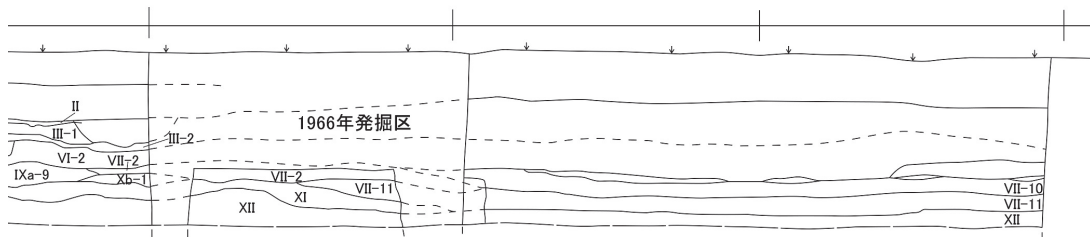
III層

調査区全体に広がる黒色～黒褐色土層で、鉄・マンガンの沈着した褐色の管状あるいは斑紋状の塊が観察された。上面では東西方向に延びる杭列が確認される。本層は2層に分層出来、砂質シルト層である III-1層では人間あるいは動物の足痕と考えられる小ピット群が検出された他、近世陶磁器の細片が出土している。一方の、粘質シルト層である III-2層は炭化物を多く含み、III-1層との境界で面をなして多量の土器が敷き詰められたような状態で検出された。以上から、III-1層は近世の水田層、III-2層は III-1層の水田開田の整地層と考えられた。III-2層の遺物について、B～H-4～8区では刻目突

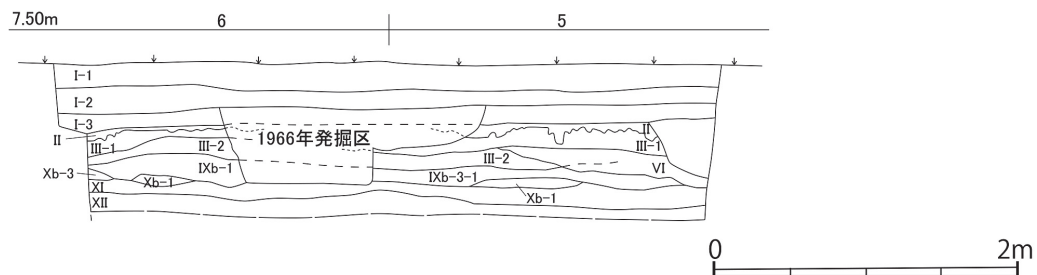
G-4～10区北壁(土層断面①)



G-4～10区中央壁(土層断面②)



H-5～6区南壁(土層断面⑤)



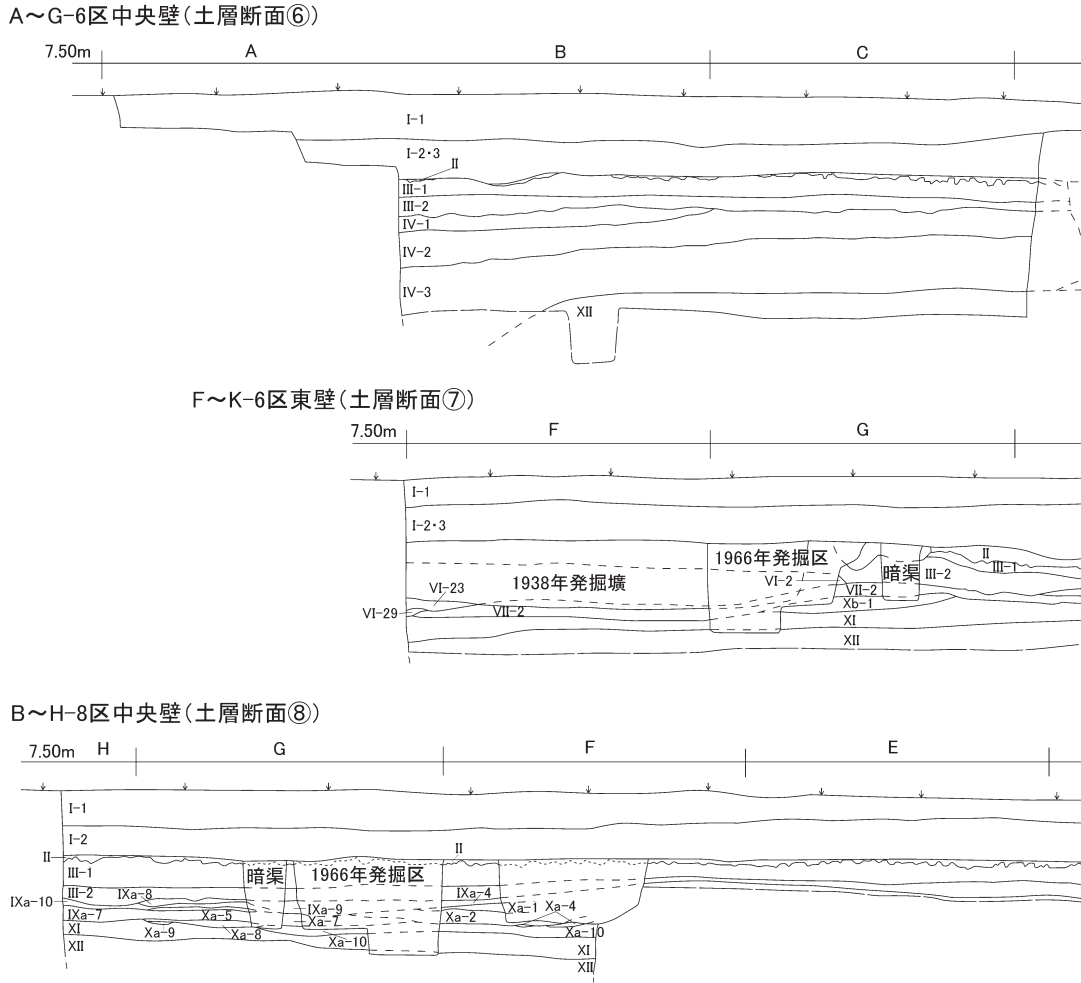


図18 1984年調査土層断面図⑥~⑧ (1/50)

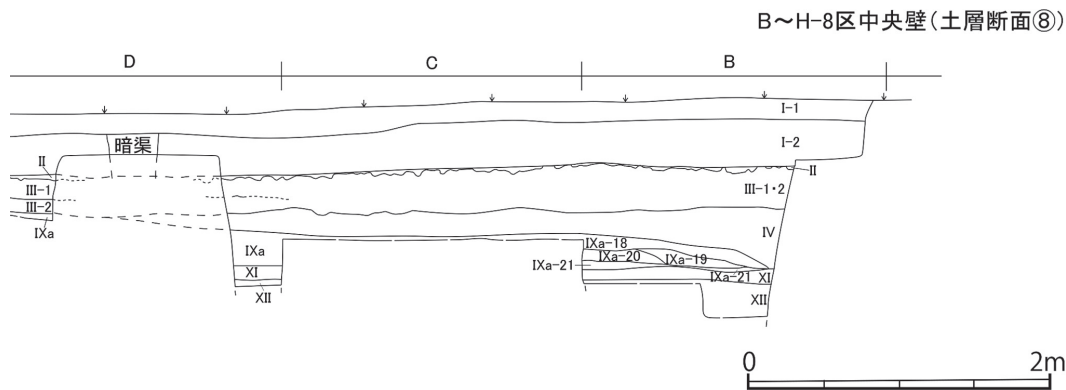
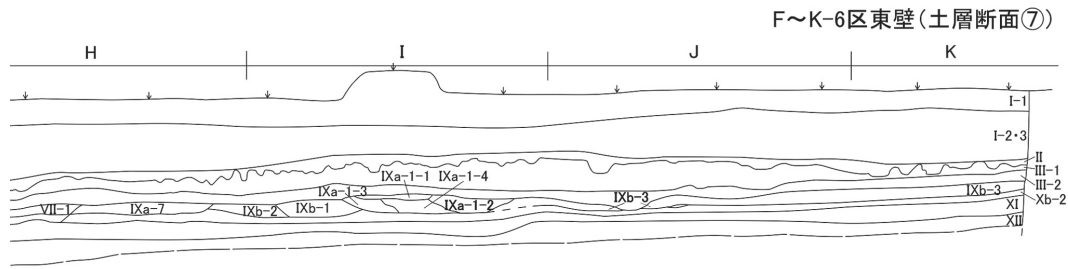
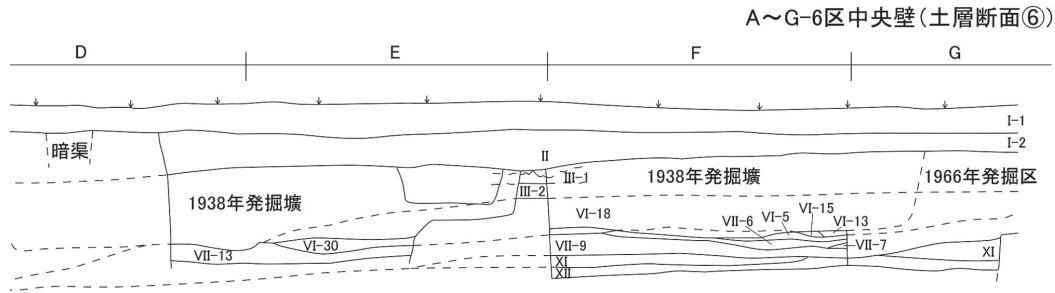
帯文土器、弥生土器、須恵器が出土したが、弥生中期土器が圧倒的多数である。J~K-5~8区では弥生中期土器と刻目突帯文土器が殆どで、土師器や近世陶磁器の細片が混じっていた。これらの多くはVI層以下の層を削平した際に出土し、整地後の鎮圧用に敷かれたものである。

なおIII-2層除去後に、K-8~9区では土壇墓（二号土壇墓）の墓壙を、K-7~8区では互いに切り合った4個の土壇群を検出した。二号土壇墓では仰臥屈葬の熟年女性に打製石鏃やガラス製小玉が伴っていた。K-8~9区の土壇群のうち、東側の1基を発掘し、弥生時代前期土器片、黒曜石剥片などが出土した。

IV層

B~C-6・8区、G~H-9~10区で検出された、泥炭状の土層。調査区の北と東に向かって次第に厚くなり、B~C-6区では3層に分層されている（IV-1~IV-3）。弥生中期土器が最も多く出土したほか、刻目突帯文土器、弥生後期土器、古墳時代前期の土師器を若干含む。

C-8~9区の本層上面で、互いに切り合った甕棺墓（一号甕棺墓、立岩式甕棺）と土壇墓（一号土壇墓）を検出した。甕棺内からは老年女性の人骨が検出された。一号土壇墓では、頭部に打欠いた壺をかぶせる熟年女性が仰臥屈葬で葬られ、硬玉製勾玉1点が出土した。本土壇墓は弥生時代中期後葉~



末に位置づけられる。

V 層

M6区のみで検出された、黒褐色の粘質シルト層。3層に分層され、下層ほど粘性が強い。板付I・II式土器を伴うが、刻目突帯文土器は含まれていない。

VI 層

1966年調査時における、弥生時代前期の貝層。G-4~8区北壁、F-6~7区北壁の土層断面によって、29枚以上に分層できる。H-4~5区北壁の下半部からは刻目突帯文土器、板付I式土器、黒曜石剥片などが出土した。

VII 層

E~H-4~7区にみられる黒褐色~黒色の粘質シルト層。1966年調査時における弥生時代前期の貝層の下層および、G-6区の黒褐色土層の上半部の刻目突帯文土器と板付I式土器を伴う土層と対応する。刻目突帯文土器、板付I式土器、黒曜石剥片などが少量出土した。F-6区より土壌試料が採取されている。

VIII 層

本層以下 XI 層までが刻目突帯文土器単純層である。VIII 層は J-8 区にみられる落ち込みに堆積した赤褐色の砂質シルト層である。炭化物は認められず、刻目突帯文土器、黒曜石の彫器、剥片などが出土した。

IX 層

刻目突帯文土器単純期の貝層および遺物包含層で、混貝土層部分の IXa 層と貝層ブロックを部分的に含む土層の IXb 層に分けられる。弥生土器を含まず、刻目突帯文土器のほか、石包丁、磨製石鏃、黒曜石彫器、土製紡錘車、土製円盤などが出土した。

IXa 層は B~J-6~10 区の南北に細長い範囲に堆積し、北から南へ緩やかに傾斜する。21 枚に分層された後、さらに堆積単位に細分されている。分層単位が判明する土壌試料としては、IXa-3 層が 1 点、IXa-4 層が 6 点あり、これらについて記載する。

IXa-3 層は G-9~10 区北壁と G-9-d 区の排水用暗渠の北側の小範囲で確認された。黒褐色の混貝土層で、G-9-d 区における平面調査では 7 枚の堆積単位が判明しているが、土壌試料の単位帰属は不明である。マガキを主として、ハマグリ、ヘナタリなどを含む。貝の破碎率は高い。G-10 区北壁断面に IV 層と凹凸面をなす部分があり、これは 1966 年の調査でイノシシの頭骨と炭化米が出土した箇所である (図 19)。

IXa-4 層は黒褐色~褐色の砂質シルトの混貝土層で、F-8-c,d 区と G-9 区に広がる。南西に向かって傾斜して堆積しており、F-8-c,d 区では 19 枚の堆積単位が確認された。このうち堆積単位 3、4、9、17、18 より土壌試料が採取された。F-8-c 区 (東側) では小さなものが多く、F-8-d 区 (西側) では南西方向

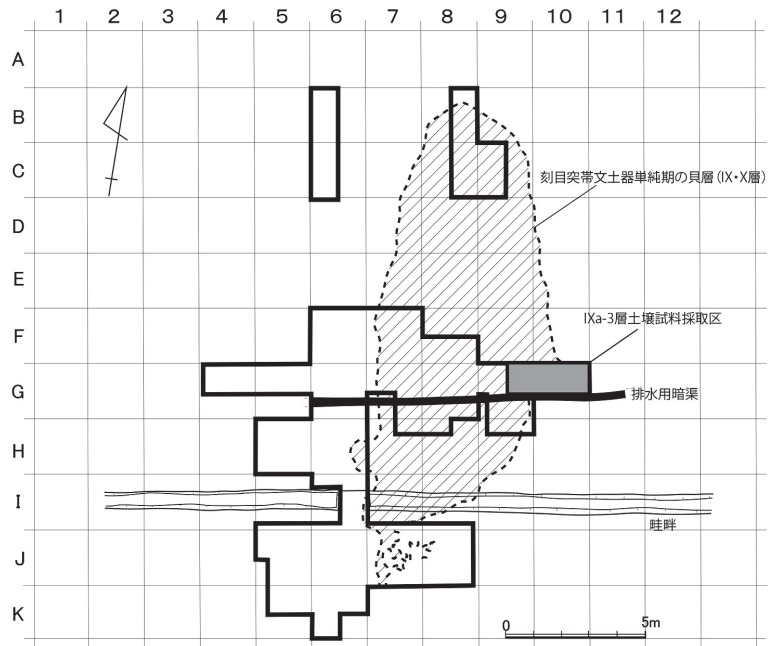


図19 IXa-3層土壌試料採取区

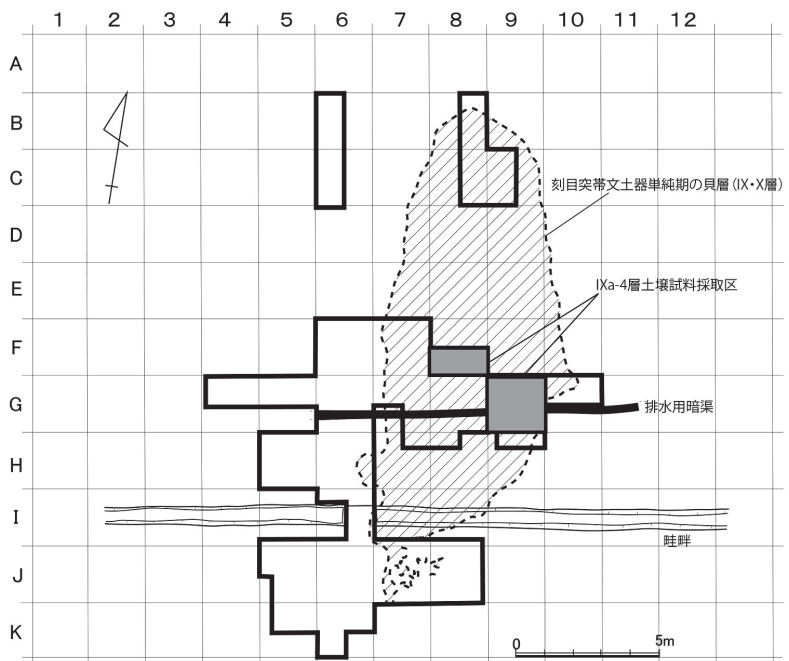


図20 IXa-4層土壌試料採取区

に流された状態で検出された。マガキを主体とし、ハマグリ、ヘナタリ、ウミニナなどを含む（図20）。

IXb層は、IXa層の南および南西側のH、I区の境界付近に広がる。1966年調査におけるH5～6区でみられた「黒褐色土層」下半部の「夜臼式土器単純層」に対応すると考えられた。本層は3枚に細分され、さらに41枚の堆積単位が知られた。

X層

貝層部分のXa層と土層部分のXb層に分かれる。刻目突帯文土器、打製石斧、打製石鏃、土製円盤、黒曜石剥片などが出土した。

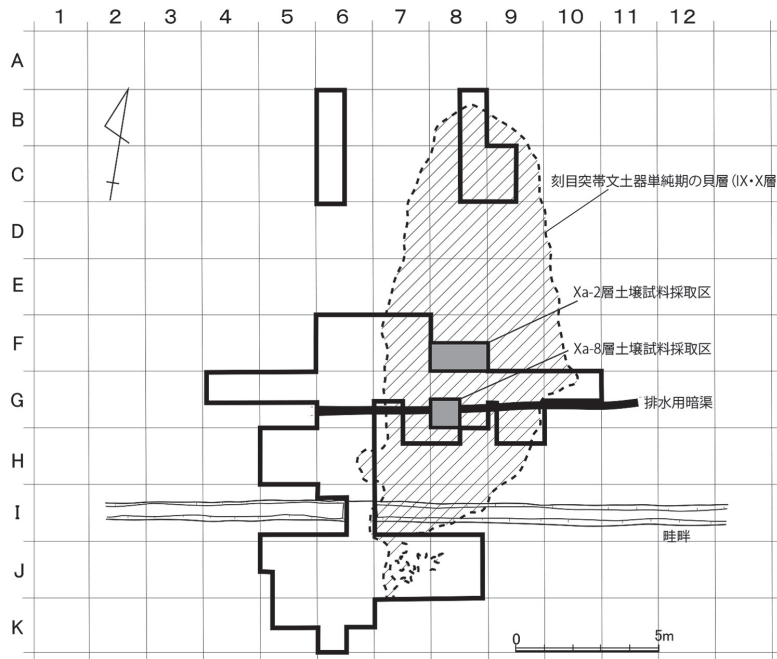


図21 Xa-2・8層土壌試料採取区

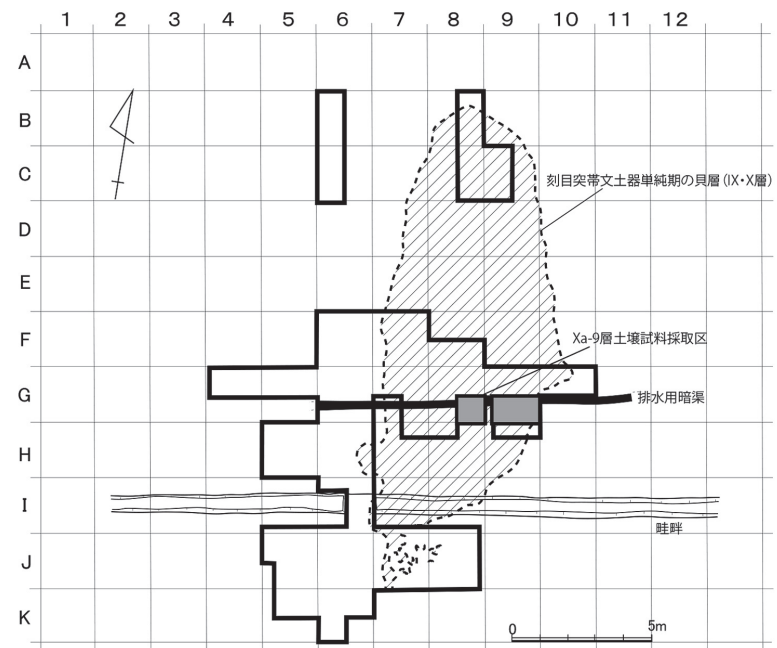


図22 Xa-9層土壌試料採取区

Xa層は10枚に細分され、それぞれでさらに細かい堆積単位が見いだされた。Xa-2, 8, 9, 10層より31点の土壌試料が採取された。Xb層は焼土、炭化物、灰などを多く含む粘質シルト層で、5枚に細分される。本層下面で出土遺物が多く出土し、G-6区では炭化米が検出された。本層の土壌試料は採取されていない。以下、土壌試料の採取されたXa層の各单位について記述する。

Xa-2層はF-8-c,d区とF-7区北壁で検出され、鉄分の著しい沈着により赤みを帯びた、暗褐色～黒褐色層である。43枚の堆積単位に細分でき、炭化物、灰、焼土が混じることが多い。マガキを主とし、ハマグリ、サルボウ、ウミニナなどを含む。下半部と西側末端附近に、完形に近い貝を含む堆積単位が集中する（図21）。本層からは46点の土壌試料が採取され、以下の堆積単位に由来するものが含まれている。

Xa-2-2層：暗褐色の粘質シルト層で灰・炭化物を多く含む。マガキを主体とし、ハマグリを若干含む。貝の破碎率は低い、完形に近いものも含まれる。土

器片を出土した。

Xa-2-5層：褐色の粘質シルトの混貝土層で、破碎率の高いマガキを主体とする。

Xa-2-10層：暗褐色の粘質シルトの混貝土層で炭化物をわずかに含む。マガキを主体とする。

Xa-2-15層：暗褐色の粘質シルトの混貝土層で炭化物を少量含む。マガキを主体とし、貝の破碎率は高いが、完形に近いものが少量含まれる。

Xa-2-17層：褐色の粘質シルトの混貝土層で炭化物をわずかに含む。マガキ・ハマグリからなり、貝の破碎率はとくに高い。鉄分の沈着がみられる。

Xa-2-21層：暗褐色の粘質シルトの混貝土層で炭化物をわずかに含む。マガキを主体とし、ハマグリ・ヘナタリなどを多く含む。貝の破碎率は低く、完形に近いものが目立つ。

Xa-2-22層：暗褐色の粘質シルトの混貝土層で炭化物をわずかに含む。マガキを主体とし、貝の破碎率はかなり高い。

Xa-2-23層：黒褐色かつ粘性の強い粘質シルトの混貝土層。灰が多く、炭化物をわずかに含む。マガキを主体とし、貝の破碎率は低く、完形に近いものが目立つ。

Xa-2-26層：褐色の粘質シルトの混貝土層で灰が多く、炭化物は少ない。マガキを主体とし、貝の破碎率は高く、少ない。

Xa-2-27層：褐色の粘質シルト混じりの貝ブロック。炭化物を多量に含む。マガキを主体とし、完形に近いものが殆どである。

Xa-2-28層：暗褐色の混貝土層で、炭化物を含む。マガキを主体とし、完形に近いものが多いが、Xa-2-27層よりは少ない。

Xa-2-32層：暗褐色の粘質シルト混じりの貝ブロックで、灰を含む。マガキを主体とし、完形に近いものが非常に多い。

Xa-2-33層：暗褐色の粘質シルトの混貝土層で、炭化物を多量に含む。マガキの完形に近いものを多く含む。貝の量は多いが、Xa-2-32層ほどではなく、土が多く混じる。

Xa-2-36層：暗褐色の粘質シルトの混貝土層で、炭化物・灰をわずかに含む。マガキを主体とし、ハマグリ・サルボウなどを含む。貝の量は多く、完形に近いものが目立つ。

Xa-2-41層：褐色の灰と焼土からなるブロックで、炭化物をわずかに含む。マガキを主体とする。貝は少なく、破碎率が高い。

Xa-2-42層：黒褐色の粘質シルトの混貝土層で、焼土・灰を非常に多く含むが、炭化物は少ない。マガキを主体とし、破碎率は低い。

Xa-5層は黒褐色～褐色のシルトの混貝土層で、鉄分の沈着により層全体が赤みを帯びる。G-7-c区、H-7-a区、G-8-c,d区、H-8-b区に広がる。26枚の堆積単位のうち、Xa-5-14、18、21の各層より土壌試料が採取された。破碎率の高いマガキを主体としたものが多い。

Xa-6層は極暗褐色～黒褐色の混貝土層で、全体に鉄分の沈着が顕著である。G-9-c,d区、H-9-a,b区、G-8-c区で東に向かって傾斜堆積している。13枚の堆積単位のうちいくつかの、土壌試料が採取されている。

Xa-8層は薄く、G-8-c区を中心とする狭い範囲に広がる。鉄分が沈着して暗赤褐色～極暗赤褐色を呈し、マガキを主としハマグリなどを若干含む。15枚の堆積単位のうち、Xa-8-9、11層より土壌試料が採取された(図21)。

Xa-9層はG-8-d区を中心とし、東北に向かって緩やかな傾斜をなす。黒色～黒褐色のシルト～粘質シルトの混貝土層で、70枚の堆積単位が検出された。本層からは26点の土壌試料が採取され、以下の

堆積単位に由来するものが含まれている（図22）。

Xa-9-12層：黒褐色の粘質シルト層で貝は含まない。部分的に黄褐色の砂を含み、鉄分の沈着が顕著である。刻目突帯文土器、黒曜石剥片を出土した。

Xa-9-13層：黒褐色。ハマグリ、ヘナタリの貝ブロックである。

Xa-9-18層：黒褐色の混貝土層で炭化物を含む。マガキを主体とし、破碎率は高い。

Xa-9-19層：褐色。マガキを主とし、ハマグリなどの二枚貝をわずかに含む。破碎率が高く、貝の量は少ない。焼土、炭化物を非常に多く含む、貝は過熱を受けている。混貝土層よりも焼土層の印象を受ける。

Xa-9-25層：黒褐色。マガキを主とする。貝の破碎率が高い混貝土層である。

Xa-9-27層：褐色。粘質シルトの混貝土層で、破碎率の高いマガキを主とするが、完形に近いハマグリなども含む。貝の量は少ないが、炭化物を多く含む。鉄分の沈着がわずかにみられる。

Xa-9-29層：灰黄褐色。炭化物を含む粘質シルトの混貝土層。マガキを主とし、破碎率は高い。

Xa-9-33層：黒褐色。粘質シルトの混貝土層で、マガキを主とし、ヘナタリなどの小巻貝をわずかに含む。貝の破碎率はやや高い。刻目突帯文土器、黒曜石片を出土した。

Xa-9-40層：黒褐色。炭化物を含む粘質シルトの混貝土層。マガキを主とし、ヘナタリ、ウミニナなどの小巻貝をわずかに含む。破碎率は高い。土器片、黒曜石剥片を出土した。

Xa-9-44層：褐色。炭化物を含む粘質シルトの混貝土層。ヘナタリ、ウミニナ、カワニナ、ハマグリなどからなる。貝の完形率は高い。

Xa-9-46層：褐色。炭化物を含む粘質シルトの混貝土層。マガキを主とし、破碎率は高い。

Xa-9-51層：黒褐色。炭化物を少量含む砂質シルトの混貝土層。鉄分の沈着がわずかにみられる。マガキを主とし、貝の破碎率は高い。

Xa-9-52層：灰褐色。炭化物をわずかに含む砂質シルトの混貝土層。鉄分の沈着がわずかにみられる。マガキを主とし、貝の破碎率は高い。

Xa-9-53層：黒褐色。炭化物を多く含む粘質シルトの混貝土層。マガキを主とし、貝の破碎率は非常に高い。土器片を出土した。

Xa-9-54層：黒褐色。炭化物を比較的多く含む、砂質シルトの混貝土層。マガキを主とし、一部加熱を受けたハマグリ、ヘナタリを含む。貝の破碎率は高い。G-7-2区では検出されていない。

Xa-9-62層：オリーブ黒色。炭化物をかなり多く含む、シルトの混貝土層。破碎率が高いマガキ

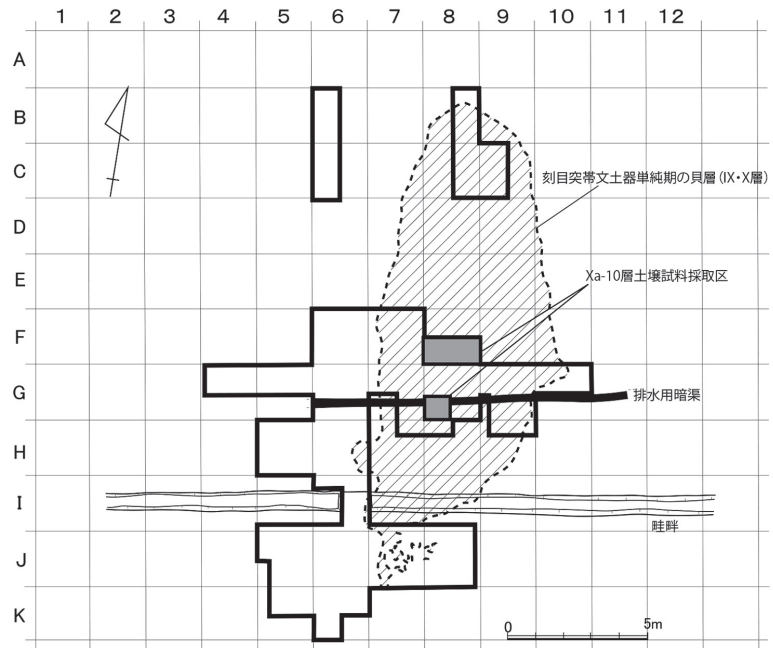


図23 Xa-10層土壤試料採取区

の細片を少量含む。

Xa-9-63層：黒色。炭化物を少量含む混貝土層で、部分的に鉄分が沈着する。破碎率が高いマガキを主とした再片を少量含む。

Xa-9-64層：黒色。炭化物を少量含む混貝土層で、鉄分の沈着がみられる。破碎率が高いマガキを主とする。

Xa-9-67層：オリーブ褐色。貝の量が少なく、土層に近い。土器片を出土した。

Xa-9-70層：オリーブ黒色。炭化物を少量含む、シルトの混貝土層。鉄分の沈着がごく一部にみられる。破碎率が高いマガキを主とし、貝を多く含む。

Xa-10層はF-8-c,d区、G-8-c区、F-7区北壁で検出された。暗褐色～黒褐色の粘質シルトの混貝土層で、25枚の堆積単位が検出された。堆積単位には、北西に流れるもの、西へ緩やかに傾斜するものの二群が認められた。本層からは3点の土壌試料が、Xa-10-13、14、17層より採取された（図23）。

XI 層

IX、X層下面にほぼ重複する、南北に細長く堆積した黒褐色の砂質シルト層。1966年調査の貝層（VII、IX-a層）下の「黒褐色土層」下半部の「夜臼式土器単純層」と対応する。刻目突帯文土器、刃器状石器、黒曜石剥片などを出土したが、IX、X層に比して遺物は極端に少ない。本層の土壌試料は採取されていない。

XII 層

粘性の強い無遺物層。B～E-4～7区では西北に向かって緩やかに傾斜し、B-6区で急に落ち込む。

以上をまとめると、XII層が刻目突帯文土器段階から弥生時代前期の基盤となる土層であり、南から北へ緩やかに傾斜し、B-6区付近で急激に落ち込む。また、全体として東へ緩やかに傾斜し、G-11区付近で急激に落ち込む。IXa、Xa層の最下面は、現在の宇木川川底の標高とほとんど差がないことから、貝層の大半は水の中に廃棄され、堆積した可能性が考えられている。この中で、XII層の検出面がやや高かった、G～H-7～9区付近からB～E-7～9区には南北に細長い高まりがあったと考えられ、IXa、Xa層（刻目突帯文土器単純期の貝層）はこの上に南から北へと堆積が進んだ。これらの貝層の南側に遺物包含層であるIXb、Xb層が堆積している。以上の刻目突帯文土器単純期の堆積の後、その西側に、刻目突帯文土器と板付I式土器の共伴期の遺物包含層であるVII層が堆積した。さらにその上に、刻目突帯文土器から板付II式土器の段階の貝層であるVI層が堆積する。弥生時代中期から古墳時代前期にかけて形成されたIV層の堆積より、貝塚形成時の沼地状から、宇木川の氾濫減に近い状態へ移行したことが知られる。

また、貝ブロックや貝の破碎率、貝層内の堆積状況から、より詳細な貝塚形成過程が復元されている。それによれば、各層位で検出された堆積単位について、30～60cm以下の範囲のものは、ほぼ一回当たりの廃棄単位、1mを超すものは破碎され流された廃棄単位と考えられている。また、1枚の貝層内の廃棄行為について、連続と中断を繰り返すような廃棄構造が想定されている。

(3) 放射性炭素年代測定結果

上記の各土壌試料から得られた炭化米、および土器内面付着炭化物の年代測定値が宮本一夫氏により報告、考察されている（宮本2018）。その結果は以下の通りである。

土壌試料検出炭化米および土器内面付着炭化物に関して、年代測定試料の調整・測定は（株）加速器分析研究所に依頼した。年代測定は、加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用

い、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準資料とした。歴年代較正年代の計算は IntCal13 データベースを用い、OxCalv4.3 較正プログラムを使用した。

土壌試料検出炭化米

IXa-3層 (F8区-d) 出土炭化米の較正年代 (1σ) は841calBC-806calBC (68.2%)、(2σ) は895calBC-803calBC (95.4%) である。

IXa-4-17層 (F8区-c,d?) 出土炭化米の較正年代 (1σ) は895calBC-867calBC (29.6%)、855calBC-823calBC (38.6%) (2σ) は902calBC-813calBC (95.4%) である。

Xa-9-67,70層 (G8区-c、G9区-d) 出土炭化米の較正年代 (1σ) は816calBC-798calBC (68.2%)、(2σ) は830calBC-794calBC (95.4%) である。

Xa-10-17層 (F8区-c) 出土炭化米の較正年代 (1σ) は846calBC-811calBC (54.6%) と892calBC-878calBC (13.6%) (2σ) は896calBC-809calBC (95.4%) である。

土器内面付着炭化物

IXb-3-1層 (J~K-5~6区) 出土土器付着炭化物 (測定番号 IAAA-171018) の較正年代 (1σ) は767calBC-748calBC (11.1%)、685calBC-666calBC (11.0%)、642calBC-587calBC (32.7%)、581calBC-556calBC (13.4%)、(2σ) は781calBC-727calBC (20.9%)、718calBC-706calBC (1.6%)、695calBC-541calBC (72.9%) である。同層同区出土土器付着炭化物 ((測定番号 IAAA-171017) の較正年代 (1σ) は818calBC-799calBC (68.2%)、(2σ) は834calBC-794calBC (95.4%) である。

Xa-8-2層 (G8区-c) 出土土器付着炭化物の較正年代 (1σ) は923calBC-891calBC (37.5%)、879calBC-846calBC (30.7%)、(2σ) は971calBC-960calBC (3.9%)、937calBC-836calBC (91.5%) である。

土壌試料検出雑穀炭化顆果

本貝塚の土壌試料から検出された雑穀炭化顆果の年代が、米田氏らによって測定、報告されている (米田ほか2019)。氏らによる測定では、イネ科雑草についてはグラファイト、雑穀顆果についてはセメントタイトが作成され、それらの放射性炭素同位体比の測定には、東京大学総合研究博物館の加速器質量分析装置 (National Electrostatics Corp. Compact-AMS) が用いられた。暦年較正には、専用プログラム OxCAL4.2 および、較正データとして IntCal3 が使用されている。

Xa-2-5層出土 (F8区-d) 出土イネ科雑草の較正年代 (1SD) は980calBC-916calBC (66.2%)、992calBC-990calBC (2.0%)、(2SD) は1016calBC-895calBC (95.0%)、863calBC-858calBC (0.4%) である。

Xa-2-5層出土 (F8区-d) 出土アワの較正年代 (1SD) は897calBC-837calBC (68.2%)、(2SD) は921calBC-814calBC (95.4%) である。

Xa-2-5層出土 (F8区-d) 出土キビの較正年代 (1SD) は895calBC-834calBC (68.2%)、(2SD) は915calBC-814calBC (95.4%) である。

Xa-9-19層出土 (G8区-c) 出土アワの較正年代 (1SD) は894calBC-868calBC (27.0%)、854calBC-819calBC (41.2%)、(2SD) は904calBC-810calBC (95.4%) である。

【図版出典】

図11 田崎1986-第3図を加工

図12・14・15・16・19~23 田崎1986-第7図を加工

図13 小田1982-第62図を加工

図17 田崎1986-第9図を加工

図18 田崎1986-第10図を加工

【参考文献】

小田富士雄1982「宇木汲田貝塚 (1) 遺構」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』
pp.135-140 六興出版

田崎博之1986「唐津市宇木汲田遺跡における1984年度の発掘調査」『九州文化史研究所紀要』31、pp.1-58

宮本一夫2018「弥生時代開始期の実年代再論」『考古学雑誌』100(2)、pp.1-27

米田穰・尾寄大真・大森貴之「宇木汲田貝塚から出土した雑穀の炭化顆果における放射性炭素年代」『東北
アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』pp.160-163

龍溪顕亮1939「金石併用期に於ける唐津地方の遺跡と遺物」『松浦史料』第1輯、pp.39-55